

思い出

昭和61～平成元年度下水道課長

生田 敏弘

私が下水道課長を在任したのは、昭和61年4月から平成2年3月までの4年間でした。その間、課長として勤めることができたのは、課員の皆さんのお陰と今も深く感謝をしている。何分にも、下水道に関する知識に乏しく、活性汚泥法のしくみはおろか、下水汚泥が溶融されて、コンクリート二次製品等に活用されるとは想像もつかないくらいでしたから、大変に迷惑をかけたと思っている。

私の就任中の仕事は、まず、昭和62年度末に小矢部川流域下水道の一部供用開始を迎えることであった。そのためには、大幅な事業費の増加を図り、幹線管渠の促進や浄化センターの整備を終える必要があった。

幸いにも、国においては、景気刺激の施策を打ちだされ、下水道や住宅等、生活関連事業に対する補正予算が重点配分になり、昭和60年度約30億円であった事業費が、供用開始を迎える昭和62年度には約104億円と、2カ年で約3倍に増えた。(公共下水道事業も約2倍) そのために、後年に建設しようと思っていた管理本館にも着手することができ、また、溶融施設や場外整備も終えることができた。

供用開始までには、工事のほかに、維持管理体制を確立する必要があり、そのために、下水道会社の設立や維持管理費用のための市町村負担額(下水道使用料)の決定について、次長などの助言を得ながら、何回も部長や知事に説明に行った。

特に市町村負担額については、当時の財政課長より、負担額に維持管理費の外に資本費も算定の根拠にするようにと催促があった。しかし、最終的に知事より「資本費を取るのは難しいだろう」ということで、原案通りで決定していただいた。しかし、財政課長からは次回の見直しの際には、資本費が算入できるか再度検討するように指示された。

懸案であった処理水の放流先も地元の理解により、城光寺橋下流地点から現在地点に計画変更し、更に、数々の二上地内の環境整備も無事に終え、昭和63年3月29日に関係者一同の長い間の並々ならぬご尽力によるこの難事業は、めでたく通水式を迎えることができた。通水式当日は、大変寒い日であったが、多くの参列者を迎えて盛大な記念式典であった。

一方、公共下水道事業についても、着実に整備され始めた。その中で一番思い出になるものは、中新川公共下水道事業である。舟橋村の一部の方が下水処理場の建設に反対され、県や建設省に何度も反対陳情された。その後、事務組合の方々の努力により円満な解決を見、今年の3月に供用開始されることは誠に喜ばしいことである。

私は、先輩課長の長い御苦勞や御努力の上に乗って、華々しい舞台をやらさせていただいたと思っており、楽しく思い出の多い下水道課時代であった。

また、全国下水道主管者会議を宇奈月の「ニューオータニホテル」で開催したことも思い出の一つである。